

快 楽 と 叡 智

正 木 晃

無上の快樂と究極の叡智とが分かちがたい関係にある。或いは、快樂と叡智とを、等号で結ぶことすら可能なのだ……。

いわゆる後期密教に特有のこの図式は、時空を越えて、常に人を惹きつける。ありていにいえば、10代の終わりの頃、私が密教研究を志した理由の一半も、この図式が発散する何かからめとられたゆえだったかもしれない。

そして、近年のチベット密教ブームもまた、この図式と無縁ではない。人間のもつ動物性の極ともいうべき生殖行為、そして人間が求めうる聖性の極ともいうべき至高の知性。近代合理主義に蹂躪されて、ながらく全く無縁とおもわれてきたこの両者のあいだに、架橋しようという試みが人々の関心を集めたとしても、それはそれで無理からぬ事態かもしれない。たとえ誤解に基づく点が少なくないとしても…。

ことにも性瑜伽（せいゆが）。つまり、男女の性行為を欠くべからざる身体技法として導入した仏教究極の瞑想法をめぐるには、あまりに衝撃的な修行法なるがゆえに、定かな根拠をもたぬ憶測と恣意的な解釈がまま行われてきた。

そうした誤解を解く意味もあって、ここでではチベット仏教の正統派を任ずるゲルク派が伝承してきたチベット密教における最高の修行法を材料に、快樂と叡智の関係を考えてみたい。

最高の叡智＝悟りとは何か

ゲルク派の宗祖であり、ブッダ以来、2500年におよぶ仏教の歴史における最後の巨人であったツォンカバ（1357～1419）は、『秘密集会タントラ』が究極の仏教なのだと主張した。特に、ナーガールージュナ（龍樹）とアールヤデーヴァ（聖天）という2人の人物がこのタントラに施した解釈と、そこから導き出された実践法こそ、悟りへの最も優れた修行法であるとみなした。これを「聖者流（聖父子流）」という。

インドでは、『秘密集会タントラ』を根本とする実践法に、二大流派が存在した。1つはジュニャーナパーダという人物が開発した「ジュニャーナパーダ流」であり、もう1つがいま述べた「聖者流」である。近年の研究成果によれば、まずジュニャーナパーダ流が先行し、聖者流がそれに続いたらしい。ツォンカバが選択した聖者流は、西暦でいえば、ちょうど1000年頃、全盛を迎えていたというが、そのあたりの歴史的な詮索は、これ以上するつもりはない。

興味がある方には、専門書をひもといていただこう。

問題は、仏教が規定する最高の叡智たる「悟り」とはいったい何か、である。もちろん、それに即答できるわけではない。ただ、ツォンカパが悟りについて、どう考えていたかくらいは、多少の推測が成り立つ。或いはチベット密教において、悟りは、人間がいかなる状態になったときに得られるものかくらいは、答えられると思うのである。

結論から言おう。ツォンカパは『秘密集会タントラ』の聖者流を修行することで、「幻身（ギュルー＝虹の身体）」と「ほんとうの光明（トゥンギ・ウーセル）」を、同時に成就したときに、人間は至高至上の叡智を獲得して、生きたままホトケになると信じていた。この両者が同時に成就することを、チベット密教では「双入（スンジュク＝双運）」と呼ぶ。つまり「双入」こそが、チベット密教の求めてやまない究極の状態なのであり、これを越える叡智は存在しない。

生起次第（しょうきしだい）と究竟次第（くきょうしだい）

ゲルク派の密教修行では、生起次第（しょうきしだい＝キューリム）と究竟次第（くきょうしだい＝ゾクリム）の、2つの段階が設けられている。

生起次第とは、簡単に言えば、私たちの世界を構成する森羅万象が、実は究極の存在であるホトケたちの顕現にほかならないことを感得する修行である。もう少し具体的にいうなら、あらゆる物質世界はホトケたちが参集する曼陀羅であり、そこに輪廻する生きとし生けるもの全てが曼陀羅をかたちづくる上で不可欠の聖なる存在であることを、瞑想して心身に浸透させることなのである。こうすることで、日常性の固い殻を破碎し、日常性を絶対化し執着しがちな私たちの意識構造を、根底から揺るがし、ホトケの正しい教えを授かる準備ができあがる。

究竟次第とは、後期密教が究極の修行法として開発した、快樂と叡智の究極の関係に基づく修行法、すなわち「性瑜伽（せいゆが）」にまつわる修行法のことである。瑜伽とは、ヨーガの音訳で、身体技法をとまなう瞑想法。その言葉の頭に、性行為を意味する性という単語が冠せられていることからわかるように、「性瑜伽」とは男女の性行為を導入した瞑想法にほかならない。究竟次第は、その名の示すとおり、究極の修行法なるがゆえに、極めて秘匿性が高く、ほんの僅かな者にしか伝授されてこなかった。

生起次第は、日本密教の修行法、たとえば曼陀羅の観想法（瞑想法）や本尊瑜伽とも類似していて、理解はそう難しくない。一方、究竟次第は、インドの後期密教、そしてそれを継承したチベット密教に特有の修行法であり、日本密教の修行法から類推することは不可能といっている。

文献について

これから『秘密集会タントラ』聖者流の修行法を、ゲルク派の高僧であったガワン・パルデン（?～1797）の『大秘密四タントラの地と道の解釈である経論を照らす書』を参照しつつ、

できる限り簡潔にご紹介しようと思う。

この書物は最近、私のチベット仏教に関する領域の師であるツルティム・ケサン（日本名＝白館戒雲）大谷大学助教授と北村太道種智院大学教授により日本語訳され発刊された（日本語訳書名『大秘密四タントラ概論』永田文昌堂 1994）。しかし、本書は逐語訳的で極めて難解なため、私がツルティム・ケサン師の許可を得て、よりわかりやすい日本語にあらためた文章をもちいる点をご了承いただきたい。

生起次第

1. 粗なる念の瑜伽

- ①粗なる曼陀羅を観想（瞑想）する。まず曼陀羅の内部に建立された宮殿を観想し、それが完成したならば、その中にホトケたちを招き入れると観想する。この場合は、ゆっくりと観想していく。
- ②ゆっくりと観想することに習熟したら、一挙に全てを観想できる段階に進む。その際、粗なる曼陀羅は一挙に観想できるが、その中に招き入れるホトケたちのうち、粗なるホトケたちは一挙に観想できるものの、一部の微細（みさい）なホトケたちはまだ一挙には観想できない。
- ③次の段階では、微細なホトケたちも、極く細かい部分まで一挙に観想できるようにする。
- ④微細なホトケたちまで一挙に観想できる段階に達する。

このようにして、生起次第の目的、すなわち日常性の固い殻を破碎し、日常性を絶対化し執着しがちな私たちの意識構造を、根底から揺るがし、ホトケの正しい教えを授かる準備ができあがる。修行者は、何を見ても、それらがホトケたちの顕現なのだと、自然に意識できるようになる。

2. 微細瑜伽（みさいゆが）

究竟次第の修行に耐えられる心身を育むためには、さらに微細瑜伽を行わずの必要がある。

- ①修行者自身の鼻もしくはリンガ（陰茎）の先端、あるいは臍や心臓に、微細な滴（ティクレ＝ビンドゥー）か文字を置くと観想して、そこに心を完全集中する。
- ②そのティクレや文字の中に、曼陀羅とホトケたちを生起する。
- ③この微細瑜伽を完璧なものにする。

これに習熟すると、「止（寂静の境地）」が実現できる。また、究竟次第で必要となる「風（ルン＝息＝生命エネルギー）」のコントロールにも役立つので、修行者は必ず、この状態に到達しなければならない。

生起次第は、通常は日に4回行ずる。しかも、行に入っているときのみならず、日常生活の全てを、この行に奉じなければならない。食事をとるときは修行者自身がホトケであり、食物

は甘露であると思って加持して食す。寝るときも、ホトケの光明に入ると念じなければならない。そうして初めて、生起次第が成就する。

本行に入る前段階にすぎない「微細瑜伽」ですでに、修行者のリング（陰茎）に滴や文字を観想することが求められ、性にまつわる修行法的一端がかいま見られる。

究 竟 次 第

ゲルク派による最も簡単な究竟次第の定義は、「風（ルン）を、鼻孔に通ずる左右の脈管（左＝キャンマ＝ララナー・右＝ロマ＝ラサナー）から、身体の中央を貫く中央脈管（ウマ＝アヴァドゥーティー）に、観想の力によって導き入れ、とどめ、溶融させて、成仏を可能にする状態を創出すること」にほかならない。

成仏を可能にする状態とは、「幻身（ギュールー）」と「ほんとうの光明（トゥンギ・ウーセル）」が、同時に成就したときである。これを「双入（スンジュク）」という。ゲルク派の考え方では、「幻身」は物質性を持ち、「ほんとうの光明」は精神性をもつ。

『秘密集会タントラ』『聖者流』の究竟次第は、全部で6つの次第から構成される。①定寂身・②定寂口・③定寂心・④幻身・⑤光明・⑥双入である。このうちで、幻身の成就がいちばん難しいといわれてきた。ツォンカパは、彼自身の述懐によれば、30代末の時点で、この幻身を完全に理解し、成就していたという。

1. 定寂身

この修行は、修行者が自分のリング（陰茎）の尿道に滴（ティクレ＝精液）を観想し、その観想の力によって、「風（ルン）」を中央脈管に導き入れ、とどめ、溶融して、「空性」を如実に体得しようとするのである。この段階では、実際には「空性」の智慧は生じておらず、生起次第から究竟次第への、いわば橋渡しの役割を果たしている。

ここで行われる内容は、もう少し具体的には、聖者流の秘密集会曼陀羅（阿闍金剛曼陀羅^{あしやく}）を、修行者自身の身体に展開し、体得することである。そのとき、修行者は、いまでも触れたように、自分のリングの尿道に滴を観想し、そこにとどめておく。

自分のリングの尿道に滴を観想し、そこに全精神を余すことなく集中していくと、「風」と「心」がじつは1つであるということに気付く。つまり、心をとどめたところが風の所在する場所なのである。このメカニズムに気付けば、修行者は自在に風＝心を操作していくことが可能になる。ここでも、リング、すなわち男性器が重要な役割を演じている。

ちなみに、8世紀以降の密教では、男性の精液は「菩提心」、すなわち悟りを求めようとする根源的な心の象徴であり、さらには菩提心そのものとみなされた。この論理を突き詰めていけば、射精は菩提心の放出と同義となる。その結果、師の僧が女性パートナーと性交し、精液と女性の愛液の混ざったものを菩提心を称して、弟子の口の中に入れる灌頂儀礼のほかは、射精は強く戒められた。従って、修行者たちは精液の保存に極度の関心を示せざるをえず、のちには夢精を恐れて眠るに眠れないという滑稽な事態さえ出来たらしい。

2. 定寂口（金剛念誦）

修行者は、自分の心臓の上端に、滴ないし真言の文字を観想する。すると、上からの風と、下からの風が、心臓のチャクラに通ずる中央脈管に入り、とどまり、溶融して、心臓の脈管の結び目が完全にほどけはじめる。

このとき、修行者は「出し・入れ・とどめる」の3つを、3つの文字の声として唱える金剛念誦か、或いは hum と hoh の2つの文字の金剛念誦の、どちらかが必要とされるので、定寂口は金剛念誦とも呼ばれる。

心臓の中央脈管に風を流入させるには、前もって心臓の上下の脈管をゆるめておかなければならない。それには、自分の鼻の先端に光の滴を観想する微細瑜伽を行わずの必要がある。

鼻の先端に光の滴を観想することは、リングの先端に滴を観想することに通じ、自分がレーギャ（実際の女性のパートナー＝カルマ・ムドラー）と性瑜伽を行っても、菩提心（精液）が漏れないようにとどめることや、自分がエーギャ（想像上の女性パートナー）と性瑜伽を行じたとき、菩提心をとどめることに習熟できると註釈されている。こうすると、生命活動が活性化され、心臓に風が集まりやすくなるという。

3. 定寂心（心清浄）

内の縁である金剛念誦などと、外の縁である印契（ムドラー＝女性パートナー）の生命活動によって、修行者を活性化し、心臓のチャクラの脈管を完全にほどいて、その中心にある「不壊のティラカ（微細な粒子＝ミシクペー・ティクレ＝ティラカ）」に風が送り込まれ溶融することになる。

風が心臓の中のティラカに完全に溶融すると、4つのヴィジョンがあらわれる。

- ①「顕明（ナンワ＝空）」明浄無垢の秋の空に、月光が充満する如き白いヴィジョン。
- ②「増輝（チューパ＝極空）」明浄無垢の秋の空に、太陽が昇った如き赤いヴィジョン。
- ③「近得（ニェルトプ＝一切空）」明浄無垢の秋の空が暮れなずんだ如きどす黒いヴィジョン。
- ④「たとえの光明（ペイ・ウーセル）」擬似的な光明のヴィジョン。

①・②・③の各ヴィジョンは「三空」といい、男女の性行為、就寝中、意識不明などの状態においても、類似のヴィジョンが出るが、根本的には人間が死ぬときにあらわれる。すなわち、定寂心の修行では、生きながら、あらかじめ死の状態を先取りすることになる。④は以後の修行で体験されるはずの「ほんとうの光明」に似ているが、あくまで類似の状態に過ぎないので、「たとえの光明（偽の光明）」と呼ばれる。

「三空」を体験するときは、たとえようなない快樂が伴うといわれ、「三空」と「三歓喜」と称される。「空」は大乗仏教最高のキーワードであり、定寂心の修行はこの「空」の諸相を「歓喜」として、如実に体得する過程なのである。

4. 幻身（自加持）

幻身はあらゆる修行の中で、最も難しいとされる段階である。幻身とは、人間が死んで、次の生命形態として、この世に生まれ変わるまでの間、つまり「中有（パルド）」の状態がまさに幻身であって、「虹の身体」とも呼ばれる。ちなみに、あらゆる生命は、その死の瞬間に、すでに次の生命形態のかたちをした幻身に変じ、その状態のまま「中有」の期間をすごし、やがてこの世に生を受ける。この点は、『俱舎論』の第3章に明示されているが、『死者の書』ではせっかく『俱舎論』の説を引用しながら、あやまった説明をしている。

幻身は、幻身同士では相手を見られるが、ふつうの人間には見えない。ただし、幻身を成就した修行者は、幻身を見ることが出来る。また、幻身を成就した者は、死に際して、前世の業に制約されず、自在に来世を得られるといわれる。

幻身がいったいどのようなものかについて、『智恵金剛集』という書物は、こう語っている。

- ①風と心のみから出来ているから、「幻の人」のようである。
- ②どこにでもあまねく存在するから、「水月」のようである。
- ③肉と骨を離れているから、人の「影」のようである。
- ④刹那に動くから、「陽炎」のようである。
- ⑤夢の中で見る「夢の身」のようである。
- ⑥実体はここにあるのに、別の場所にあらわれる「反響（山彦）」のようである。
- ⑦「蜃気楼」のようである。
- ⑧1つなのに、多くのあらわれをもつから、「魔術」のようである。
- ⑨物質的存在に汚されず、混じり合わないであらわれるから、「虹」のようである。
- ⑩肉体の中にあることは、「雲の中の雷」のようである。
- ⑪空の状態から忽然と出現する点は、澄み切った清水から「泡沫」が生ずるようである。
- ⑫一切が完璧である点は、鏡の中に「持金剛（密教究極のホトケ）の影像」が出現するようである。

さて、幻身を出現させるためには、定寂心でおこなった順序とは逆の手順を踏む。すなわち、心臓のチャクラの中の「不壊のティラカ」に溶融していた風を、今度は少し動かし、解放するのである。すると、定寂心のときとは逆向きのヴィジョンがあらわれる。

- ①「たとえの光明」
- ②「近得」
- ③「増輝」
- ④「顕明」

このとき、心臓のチャクラの中の「不壊のティラカ」に溶融していた風が「幻身」に変容する。この逆の過程は、死んだ人間が、再び再生するまでの過程にあたる。いいかえれば、「中

有」の状態を体験することにほかならない。

ただし、繰り返し述べたように、幻身を出現させることは至難とされる。そのため、以上の行に先立って、修行者の身体を、粗大な身体と微細な身体とに分けておいたほうがいいといわれる。これにも、やはり修行者の観想の力が用いられる。

より具体的にいえば、「遷移（ポワ）」と「入魂（トンジュク）」の修行がいいと勧められている。「ポワ」は、自分の意識を体外に離脱させる行法であり、「トンジュク」は離脱させた意識を他の動物に注入する行法である。「トンジュク」はあまりに難しいとされるから、ここでは「ポワ」についてだけ、簡単に説明しておこう。

まず、修行者は、身体にある眉間・眼・耳孔・鼻孔・口・臍・尿道・肛門の八孔を閉じ、頭頂にある梵孔（ブラフマ孔）を開く。自分の眼前に守護尊を観想し、心臓のチャクラの中で飛び跳ねている滴（ティクレ＝光を本質とする生命エネルギー）をも観想する。下向きの風（ルン）を上に向かって引き上げるとともに、ヒックという声を出して、眉間まで引っ張りあげる。次のヒックという声で、同じように、ティクレを眉間から額に引っ張りあげる。3回目のヒックという声で、ティクレは頭頂にある梵孔に達する。最後に、ペットという声とともに、ティクレは梵孔を飛び出し、守護尊の胸の中に溶け込むのである。

もっとも、このような熾烈な努力にもかかわらず、この段階で出現する「幻身」は、まだ完全には浄化されておらず、それゆえに「不浄の幻身」と呼ばれる。完全に浄化され「幻身」を成就するのは、次の段階で「ほんとうの光明」を得てからあとのことで、それまでは以前の粗なる身体を全く捨て去ることは出来ないのである。

5. ほんとうの光明（楽現覚）

全身全霊をあげて、心臓のチャクラの中にある「不壊のティラカ」に、すべての風を送り込み溶融させる。すると、いままでに体得した「顕明（ナンワ）」・「増輝（チューバ）」・「近得（ニェルトブ）」がみな1つに溶け込み、「ほんとうの光明（トゥンギ・ウーセル）」が体得される。その際、風（ルン）は、「ほんとうの光明」の乗り物の役割を果たす。

このとき、最高の快樂である「大楽」が生じ、その大楽の最中、修行者は「空性」を、文字どおり、目の当たりにするという。ついに「四空」が成就するのである。

ここで気を付けなければならない点は、「ほんとうの光明」という表現をしていても、それは私たちがイメージしがちなこの世の光ではないことである。「ほんとうの光明」とは、あらゆる言語表現を遙かに越えた体験を示唆する、まさに仮の言葉に過ぎない。ある種の体験の中で、光輝くヴィジョンを得て、それが「ほんとうの光明」だと思いこんでいる人もあるようだが、全くの誤解といっている。

そうした原因の一端は、「ほんとうの光明」を英訳する際、clear light としたことにある。幻覚体験の比較的表層で出現する光のヴィジョンを、チベット密教が意図する究極のヴィジョンと取り違えた結果が、こんなあやまちを生み出したのであろう。

6. 双入

前段階で「ほんとうの光明」を体得したならば、今度はもう一度前にもどって、「幻身」を出現させる。つまり、心臓のチャクラの中の「不壊のティラカ」に溶融していた風を、少し動かして、解放して、「ほんとうの光明」として1つに溶け合っていた「顕明（ナンワ）」・「増輝（チューバ）」・「近得（ニェルトブ）」を再び分離して、

- ①「近得（ニェルトブ）」
- ②「増輝（チューバ）」
- ③「顕明（ナンワ）」

の順序に展開するのである。

こうすると、再び「幻身」が出現するが、今回はすでに「ほんとうの光明」によって、過去世の業や今生の煩惱が完全に浄化されているので、出現した「幻身」は完璧に「清浄な幻身」となる。

こうして「ほんとうの光明」と「清浄な幻身」を同時に成就させることには、いうまでもなく、最高の快樂の中の快樂が伴う。それは大樂にも勝る大樂であり、自他の区別など雲散霧消して、自在に生きとし生けるものことごとくを、至福の中で救済する境地に入る。これが「双入（スンジュク）」である。

さらに、この境地を生きて、充分な功德と智慧を集積したとき、ついにホトケからもこれ以上何ら教えを請う必要のない境地に到達する。それが「無学の双入」であり、ホトケの境地そのものである。ここで人はホトケとなる。すなわち、成仏である。

性 瑜 伽 の 実 践

以上の秘密集会タントラ聖者流の修行法では、修行の核心部分において、必ず性瑜伽ないし性瑜伽に類する行法が行じられる。

まず最初に、生起次第の微細瑜伽のなかで、修行者は自分のリング（陰茎）の先端に、滴（ティクレ）や文字を観想する。これは、「止（寂静の境地）」を実現するためである。また、究竟次第で必要となる「風（ルン＝息＝生命エネルギー）」のコントロールの、いわば準備のための修行でもある。

次いで、究竟次第の第1段階の位置する「定寂身」において、修行者は自分のリング（陰茎）の尿道に滴（ティクレ＝精液）を観想し、その観想の力によって、「風（ルン）」を中央尿管に導き入れ、とどめ、溶融して、「空性」を如実に体得しようと試みる。自分のリングの尿道に滴を観想し、そこに全精神を余すことなく集中していくと、「風」と「心」がじつは1つであるということに気付く。つまり、心をとどめたところが風の所在する場所なのである。このメカニズムに気付けば、修行者は自在に風＝心を操作していくことが可能になる。

第2段階の「定寂口」では、心臓の中央尿管に風を流入させるために、微細瑜伽を行じて、

心臓の上下の脈管をゆるめる。この行は、次の定寂心で自分がレーギャ（実際の女性のパートナー＝カルマ・ムドラー）と性瑜伽を行じて、菩提心（精液）が漏れないようにとどめることや、自分がエーギャ（想像上の女性パートナー）と性瑜伽を行じたとき、菩提心をとどめることに習熟させる目的がある。註釈によると、こうすれば生命活動が活性化され、心臓に風が集まりやすくなるという。

第3段階の「定寂心」は、いよいよ性瑜伽の実践である。ここでは、内の縁である金剛念誦（霊力をもつ特殊な言葉の読誦）などと、外の縁である印契（ムドラー＝女性パートナー）の生命活動によって、修行者を活性化し、心臓のチャクラの脈管を完全にほどこいて、その中心にある「不壊のティラカ（微細な粒子＝ミシクペー・ティクレ＝ティラカ）」に風を送り込み溶融させる。

かくて、風が心臓の中のティラカに完全に溶融すると、「顕明（ナンワ）」・「増輝（チューバ）」・「近得（ニェルトプ）」・「たとえの光明（ベイ・ウーセル）」からなる4つのヴィジョンがあらわれる。このうち、「顕明」・「増輝」・「近得」の各ヴィジョンは「三空」といい、男女の性行為、就寝中、意識不明などの状態においても、類似のヴィジョンが出るが、根本的には人間が死ぬときにあらわれるとされる。すなわち、定寂心の修行では、生きながら、あらかじめ死の状態を先取りすることになる。

この「三空」を体験するときは、たとえようのない快樂が伴うといわれ、「三空」と「三歓喜」と称される。「空」は大乗仏教最高のキーワードであり、定寂心の修行はこの「空」の諸相を「歓喜」として、如実に体得する過程なのである。

第4段階に位置し、最も難しいとされる「幻身」では、前段階の行法を逆に行じる。すなわち、心臓のチャクラの中の「不壊のティラカ」に溶融していた風を、今度は少し動かし、解放するのである。すると、定寂心のときとは逆向きのヴィジョンがあらわれる。もちろん、性瑜伽が必然的に伴う。すでに触れたように、この幻身という修行の段階は、死から再生する過程をたどることが目的である。

このとき、心臓のチャクラの中の「不壊のティラカ」に溶融していた風が「幻身」に変容する。この逆の過程は、死んだ人間が、再び再生するまでの過程にあたる。いいかえれば、「中有」の状態を体験することにほかならない。

第5段階の「ほんとうの光明」では、全身全霊をあげて、心臓のチャクラの中にある「不壊のティラカ」に、すべての風を送り込み溶融させる。すると、いままでに体得した「顕明（ナンワ）」・「増輝（チューバ）」・「近得（ニェルトプ）」がみな1つに溶け込み、「ほんとうの光明（トゥンギ・ウーセル）」が体得される。

まさに、その瞬間、最高の快樂である「大樂」が生じ、その大樂の最中、修行者は「空性」を、文字どおり、目の当たりにするという。ついに「四空」が成就するのである。

ゲルク派では、「ほんとうの光明」を成就するにあたり、第3灌頂（般若智灌頂＝女性との性行為を必須とする灌頂〔イニシエーション〕）と第4灌頂（言葉による灌頂）を授けておくか否かをめぐり、またその順序をめぐり、論争があった。この点は極めて専門的な事項に属するので、ここでは触れないが、第3灌頂を授ければ、印契（ムドラー＝女性パートナー）の生

命活動によって、修行者がさらに活性化され、「三空」が目当たりになり、さらに第4灌頂を受ければ、そのときほんとうの大樂を生じて、空性を目当たり出来るという説も存在した。

最終の第6段階である「双入」は、もう一度前にもどって、「幻身」を出現させる。つまり、心臓のチャクラの中の「不壊のティラカ」に溶融していた風を、少し動かし、解放して、「ほんとうの光明」として1つに溶け合っていた「顕明（ナンワ）」・「増輝（チューバ）」・「近得（ニェルトブ）」を再び分離して展開させる。

すると、再び「幻身」が出現するが、今回はすでに「ほんとうの光明」によって、過去世の業や今生の煩惱が完全に浄化されているので、出現した「幻身」は完璧に「清浄な幻身」となる。こうして「ほんとうの光明」と「清浄な幻身」を同時に成就させることには、いうまでもなく、最高の快樂の中の快樂が伴う。それは大樂にも勝る大樂なのだという。

要するに、第3段階以降の修行では、いずれも性瑜伽が実践されるべきことが説かれているのである。

『秘密集会タントラ』が、大乘仏教の正統な後継者として、その冒頭に「ブッダは、一切の如来たちの身・語・心の源泉たる諸々の金剛女陰に住したもうた（ブッダは、あらゆる如来たちにとってあらゆる真理の源泉である複数の女性たちの性器のなかにおられた＝女性たちと性瑜伽を行じておられた）」という衝撃的な文言を掲げて登場したのは、8世紀のことだったといわれる。そして、このタントラを根本的な典拠とする秘密集会タントラ聖者流の修行法が流行したのが、紀元1000頃のインド。この時期、このタントラを奉ずる密教行者たちは、以上の解説に説かれた通りの行を実践していたらしい。

なぜ、性瑜伽が必要か

修行において性瑜伽を行ずる理由、別の表現をするなら女性パートナーを必須とする理由は、これまでの解説による限り、以下の2点に集約される。

- ①女性のもつ生命エネルギーによって、修行者の生命活動を活性化するため。
- ②究極の把握対象である「空性」を体得するため。「空性」のヴィジョンは、男女の性行為の最中にも生ずるという認識が、その背景にある。

①の点についていえば、秘密集会タントラ聖者流の修行はあまりに過酷であって、通常の生命力ではとても全うできない。ゆえに、修行者の生命力を活性化する必要が生ずるが、それには女性との性行為を導入した瑜伽（ヨーガ）が欠かせないからだという。

また、②の点に関してつけ加えれば、「空性」のヴィジョンは本当は人間が死ぬときにあらわれるという認識が前提になっている。つまり、男女の性行為が孕むであろう「死の先取り」が、性行為による「空性」のヴィジョン体験を背後で支えていることになる。しかも、「空性」の把握はたとえようのない快樂が伴うといい、「空性」は同時に「歓喜」でもあるとされるの

で、ここでは当然ながら、性行為の快樂がキーワードになってくる。

ただし、秘密集会タントラ聖者流の修行法、わけてもその中核におかれる究竟次第の第3段階以降の修行は、ゲルク派の関係者によると、極めて危険なものである。究竟次第の第3段階以降といえば、それは性瑜伽の実践にほかならないが、そこで行われる内容は、聞くところでは、極端な呼吸コントロールを駆使して、心停止ないしは心停止に非常に近い身体状況を創出することだといひ、歴代この負担に耐えきれず、死ぬものが相次いだとも伝承されている。

すなわち、秘密集会タントラ聖者流における性瑜伽は、本来、「樂」を標榜しながら、その実は死に直面することをもくろむ手段だったのである。先に指摘しておいた男女の性行為が必然的に孕んでいるという死。その死を、性行為がかもしだす快樂を極限まで追求することを通して、わがものにしようとする。それが、この修行法の本質だったのだ。ちなみに、性行為の極限的な快樂追求と極端な呼吸コントロールによる心停止状態の招来とは、必ずしも矛盾しない。いささか穩当を欠く言い回しかも知れないが、ある種の向精神薬がもたらす心身のありようは、そうした状態にかなり近い可能性があるゆえだ。しかも、4つのヴィジョンを出現させるためには、身体的な危機、もっといえば、死亡率が相当に高い身体状況を実現する必要があるといひいい。

快樂の仏教的解釈

では、仏教は快樂を、いったいどのように考えてきたのだろうか。それを少し探ってみよう。

仏教は、ブッダ以来このかた、出家にあたって「五種不男（ごしゅふなん＝五種類の不完全な男性）」と「二形（にぎょう＝半陰陽）」の規定を設け、健全な肉体をもつ男性であることを強く要請した。いいかえれば、性欲をもつ男性だけが出家できるのであって、性的不能者や同性愛者は、初めから排除されていたのである。また、出家は、性欲が最高潮に達する青少年期以前になされるべきであって、性欲が衰えてからの出家には二義的な意味しかあたえられていない。

極く端的に表現するなら、仏教は熾烈な性欲を、修行によって、悟りへの原動力に変容させることをもくろんだのである。或いは、性欲に代表される肉の領域を、靈の領域に変容させることはかった。その際、密教以前の仏教は、禁欲を掲げていたのに対し、密教は性欲を、場合によっては噴出させることによって最高の叡智を得ようとしたが、仏教の歴史全体から見れば、密教のそうした立場はやはり特異といわざるをえない。

しかし、ここで注意すべきことがある。それは仏教はブッダ以来、快樂を必ずしも全面的に否定はしてこなかったという点である。むろん、世俗における一般的な快樂追求は、執着の最たるものとして、完全に否定された。だが、修行における或る特殊な状態の快樂は、その限りではなかった。

修行における或る特殊な状態の快樂とは、瞑想がもたらす快樂である。この快樂だけは、容認されるどころか、積極的に求められた。もっとも、この志向は仏教独自というよりも、仏教以前にまで遡るインド精神界の動向に淵源がある。

古代インドの精神界では、瞑想は究極の状態を実現するほとんど唯一の手段であった。一説には、或る時点までは向精神薬による実現も許されていたものの、何らかの理由により、それは堅く禁じられ、専ら瞑想によって究極の状態を求める方向に向かったという。

ともあれ、この重要極まりない瞑想には、つごう3つの属性が設定されていた。精神性 cit・存在性 sat・快楽性 ananda である。この3つを満たさない以上は、瞑想は不完全であり、究極の状態など決して実現しないと信じられていたのである。簡単にいえば、心地よい瞑想が、よい瞑想にほかならない

これら3つの属性相互の関係はかなり微妙で、突き詰めて考えてみると、3つのうち、精神性と存在性は、快楽性に内包されてしまうかもしれない。いいかえれば、快楽性の実在が、精神性と存在性の実在を保証するという構造をもつわけだ。さらにいえば、現実の修行のなかでは、精神性と存在性は快楽性の実現を通じてのみ、その実在が確かめられるとあっていい。やや余談めいて恐縮だが、ブッダ最愛の弟子の名がアーナンダ（阿難）であったという事実は、以上の事柄に照らすとき、あまりに出来すぎた逸話である。

大乘仏教では、快楽の正当性は「大楽」というカテゴリーで論じられることが多い。この論理は、この世におけるありとあらゆるものが本質的に清浄であって、人間の諸々の行為もまた本来清浄なのだという思想である。この思想は、最古の大乘仏典とされる「般若経」に源があるといわれ、7世紀頃に成立した「理趣経」で、人間の煩惱はもとより、性行為すらも菩薩の一境地にほかならないと宣言された。

こうした考え方は、ふつうは思想の自立的運動の結果とみなされてきたが、私はそうとも限らないと思っている。おそらく、まず最初に修行の体験が根底にあり、思想としてまとめられたのは後のことであろう。事実、この種の修行を積んだ人々にきくと、或る種の修行法では、いやおうなく快楽が突出するという。よく修行は苦しいものとされ、難行苦行の言葉もあるくらいだが、実際は或る点を越えれば、修行は苦しみをはるかに凌ぐ快楽に変容する。その強烈さは世俗の快楽の比ではない。修行者が世俗を捨て、修行に精進できる本当の理由は、実はこちらあたりにある。

座禅しかり、念仏しかり。ましてや密教の性瑜伽はいうまでもない。もっとも、先に指摘したように、密教修行がもたらす快楽は、場合によっては、死と隣り合わせではあるが。しかし、死と隣り合わせであるような快楽ほど熾烈な快楽は、この世にまたないともいえる。

女性パートナーの位相

一方、修行者のパートナーをつとめる女性は、どのような位相を占めていたのだろうか。概してタントラが説くステレオタイプは16歳の処女である。だが、同時に、たとえば最も性にまつわる表現を多用するタントラである「ヘーヴァジュラタントラ」は、あらゆる年齢の女性たちを、全く平等に愛せよと主張する。

さらに、その人数も様々な解釈があり、必ずしも一定しない。「秘密集会タントラ」、「ヘーヴァジュラタントラ」や「サンヴァラタントラ」は、同時的に複数の女性を愛せと規定するが、

実際にこれらのタントラを典拠に性瑜伽を実践した密教行者の記録を読むと、大概はたった1人の女性しか相手にしていないようである。

また、女性パートナーは「ヨーギニー（瑜伽女）」とか「ダーキニー（荼吉尼）」とか呼ばれ、少しでも油断すると、男を喰い殺すような「猛悪な女」とされているが、こうした描写はどうやら観念的に作り上げられた形成が濃い。ただし、インドにおいて密教行者のパートナーをつとめた女性の多くは特別な階級に属していたことは確かで、一説には母から娘へと特殊な性的技法を伝承していた娼婦だったともいう。

チベットにおける性瑜伽の場合は、インドのかかる実状とは趣を異にし、私が知りえた範囲では、少なくとも偉大な密教行者に関しては、同時に複数の女性を相手にしたという記録は見当たらない。彼らの女性パートナーは、まず間違いなくたった1人にすぎず、彼女との長期にわたる性瑜伽の実践によって悟りを得たと伝えられる。

それどころか、チベットないしチベットに直接的な影響をあたえたと思われる密教行者のパートナーは、むしろ女性の方が主導権を握っていた感すらある。

2つほど、例を挙げよう。チベット密教の代表的な修行法とされる「ナーローの六法」を開発したというインド人の密教行者ナーローパ（1016～1100）は16歳のとき、はるか年上であった可能性の高い女性密教行者ニグマの指導のもとで性瑜伽の実践に励んだといい、2人の関係はその後、8年間続いた。ニグマは「ナーローの六法」に近いと伝えられる密教の修行法「ニグマの六法」を開発したともいわれ、密教の理論に関する著作をしたためるほどの抜群の知性の持ち主でもあった。

現在でもチベット密教における重要な修行法の1つに数えられる「チュー＝自分の肉体を切り刻み、悪魔たちに慈悲の心をもってあたえ、あらゆる執着を断つ瞑想法」を創始し、あわせてシチュー派という密教の一派を開いたマチク・ラブドゥンマ（1055～1143）は、インドから訪れた密教行者タムパ・サンゲ（?～1117）のパートナーとして性瑜伽を実践し、彼女自身も悟りを得たと伝えられる。

別説では、タムパ・サンゲの関与は存在せず、マチク自身の圧倒的な霊的力が無名の男性行者との性瑜伽により開発されたともいう。いずれにせよ、女性が仏教の宗派の開祖になった実例はマチク以外にはない。

おそらく仏教は、女性が悟りを得ることをもともと考えていなかった。これは周知の事実であろう。だが、性瑜伽が流行した8世紀から10世紀にかけての時期に悟りを得た、いわゆる「成就者」の伝記である「八四成就者伝」をひもとくと、そこには5人の悟りを得た女性の物語がつつられている事実気付く。これも、性瑜伽の実践では、女性パートナーの力が大きく関与していたことの明証であり、他の仏教と性瑜伽を実践した密教との見解の相違にちがいない。

快樂のゆくえ

「秘密集会タントラ聖者流」を最高の仏教をみなし、その整備に生涯を捧げたツォンカパの

性瑜伽に対する見解を述べておこう。

一言でいえば、ツォンカパは性瑜伽の有効性は求めながらも、その実践は否定し、瞑想としてのみ、この修行を行わずを求めた。つまり、究竟次第において、性瑜伽の実践が要請されている部分は、修行者の霊的な力によって、女性パートナーを出現させ、彼女を相手にすべしと結論づけたのである。こういって、そうか、想像力によって女性パートナーを出現させるのかと解釈されがちだが、チベット密教の場合、ここでいわれていることは単なる想像力のカテゴリーを完全に超越した霊的としか表現できない力にほかならない。

この点は常識的な理解を超える内容なので、これ以上は深入りしないが、たとえば曼陀羅の瞑想でも、図に描かれた曼陀羅は、あくまでほんの入り口にすぎず、たとえ想像力を駆使して眼前の曼陀羅の通りに脳裏に復元したとしても、それはチベット密教が求める曼陀羅の瞑想ではない。あえていうなら、想像力がもたらした曼陀羅は、それが完成した時点で、一旦消し去られる対象であり、一度は空無と化した修行者の前に、今度はまさに実体として顕現するものなのである。

女性パートナーを顕現させる場合も、これと同じで、ツォンカパが指定した修行を正しく経た者が顕現させた女性パートナーは、現実の女性よりも遙かに霊的な力に富み、行を成就させるという。聞くとところによると、現実の女性は、かえって邪魔になるともいう。もっとも、現実の女性パートナーを排除してしまった結果、女性が悟りを得る機会を奪ってしまったともいえるわけで、事実、ツォンカパ以降、女性の偉大な密教者はあらわれなかった。

さて、最後に確認しておかなければならない点がある。それは、性瑜伽では、原則として、射精が伴わないことである。このことは、理屈の上では、精液が菩提心に同定されるゆえにほかならない。したがって、性瑜伽において、たびたび強調される絶大な快樂は、通常の性行為における射精による快樂とはまったく異なることになる。

射精を伴わないということは、快樂に終わりが無いことを意味する。つまり、タントラが繰り返して唱えてやまない絶大な快樂とは、その瞬間の快樂の激烈さも去ることながら、より重要なのはその時間的な持続に起因していると思われるのだ。

研究者自身の個人的体験をまじえることには異論もあろうが、あえて語らせていただければ、(性瑜伽ではない) 或る種の行のなかで私が体験した快樂は2時間以上にも及び、しかも射精のような局所的に生ずる快樂ではなかった。まさに全身的な快樂であって、いささか語弊があるかもしれないが、その快樂は男性のそれではなく、女性が得られるであろう最高の快樂に比すべきものであると感じられた。

私はこの点にこそ、性瑜伽の最大の秘密があると思ふ。要するに、性瑜伽は、性行為のかたちを採用するものの、その実は性行為ではなく、あくまで瞑想法の極なのだ。だから、単に性行為を重ねたところで、悟りは決して得られない。また、女性の快樂こそ、キーワードであって、女性パートナーを必須とするゆえんも、本来、彼女たちの快樂にあったらしい。極論するなら、性瑜伽とは、修行者が男性を超え、女性を導き手としつつ女性の快樂をわがものとし、さらにその快樂を、いわば跳躍台として、悟りの世界へ飛ぼうとする究極の瞑想法ではなかったか。

参考文献

参考に供した文献は数多いが、ここでは単行本として出版され、且つ入手しやすいもののみをあげた。

立川武蔵「西藏仏教宗義研究」第1巻トゥカン『一切宗義』サキャ派の章 東洋文庫 1974

西岡祖秀「西藏仏教宗義研究」第2巻トゥカン『一切宗義』シチュ派の章 東洋文庫 1978

平松敏雄「西藏仏教宗義研究」第3巻トゥカン『一切宗義』ニンマ派の章 東洋文庫 1982

福田洋一・石濱裕美子「西藏仏教宗義研究」第4巻トゥカン『一切宗義』モンゴルの章 東洋文庫
1986

立川武蔵「西藏仏教宗義研究」第5巻トゥカン『一切宗義』カギュー派の章 東洋文庫 1987

D. I. Snellgrove "The HEVAJRA TANTORA" Oxford University Press 1959

ツルティム・ケサン（白館戒雲）・北村太道『大秘密四タントラ概論』永田文昌堂 1994

ツルティム・ケサン（白館戒雲）・正木晃『密教の世界』新人物往来社 1994

津田真一『反密教学』リブロ・ポート 1987

G. トウッチ（金岡秀友・秋山余思訳）『曼陀羅の理論と実際』金花舎 1992

高田仁覚『インド・チベット真言密教の研究』高野山大学内「密教学術振興会」